

NEWS LETTER

Vol.5 開催日2019.8.22

発行：基幹型包括支援センター
NPOまち育てセンターりた、岡崎市長寿課
20の地域包括支援センター～地域包括ケアと地域共生社会の実現に向けた学びを共有するゼミ～
協議体立ち上げ支援モデルの取り組みを紹介します。自分の住むまちについて、話し合う場を作りたい
by 社協包括（連尺・愛宕学区）

【目的&ねらい】役員の業務負担や町内ごとの地域差などにより、学区規模の話し合いの場がなかった地域に働きかけ、福祉課題の解決につなげる。

【活動報告】昨年12月：県アドバイザーさわか福祉財団長瀬氏とワーキング。いままでの地域活動の「やらされ感」をなくすには、住民自身が「やりたい。」と思わなければならないと助言を受ける。

5月：第1回わがまちを考える会、アンケート実施

6月：第2回助け合いゲーム
第3回協議体立ち上げに向けたワーク

7月：連尺協議体19名参加。愛宕は新たな協議体立ち上げではなく、既存の組織の横のつながりを強めることにする。

- ・キーパーソン／総代会長、社教委員長、民生・児童委員協議会長、学区福祉委員長
- ・成果／今まで関わりがなかった人と接点を持つことができ、活動について話し合うことができた。庁内の垣根を超えた話し合いができた。連尺の協議体では、野良猫、樹木・雑草等の福祉以外の生活に密着した話題が出る。
- ・予定／連尺学区は月1回協議体を実施。2月に、交流会ができるとよい。
- ・課題／愛宕学区はもとより連携できている部分も多いので、組織ごとの横のつながりを強めるために、議事録を回す等など試みていけるか。

【助言】アイデア出し型のモデルは、今までの地縁型組織を中心とした方法と異なるので興味深い。今後の経過も共有しながらひとつの選択肢として進めていけるとよい。

今回のキモ！



助け合いゲームを実施。助け合いって大変というイメージが強いが、参加者に、「これくらいなら私でもできる」と思ってもらうことができた。具体的にわが事として考える事例としてわかりやすかった。

【目的&ねらい】住民がわが事として取り組みをするために、複数学区で勉強会を実施し、互いに刺激し合いながら課題意識を高めていく。

自分の住むまちについて、話し合う場を作りたい
by 高年者包括（緑丘・美合学区）

今回のキモ！



わが事として取り組むために、住民自身が「話し合いたい」、「話し合う場を作る」と決めるステップを大切に。役員ではない人が参加しているところが新しい。

【活動報告】12月～6月：上記に同じ。7月：緑丘協議体10名参加。美合は、協議体立ち上げに至らなかった。

- ・キーパーソン／総代会長、社教委員長、民生・児童委員協議会長、学区福祉委員長
- ・成果／緑丘学区で協議体が発足。全員女性、主婦も多い。豪雨時は、水が溜まる地域であるため側溝の掃除、公園清掃、公園で寝ている人への対応などと課題が繋がっていった。
- ・予定／緑丘学区は、月1回協議体を実施。協議体での話し合い結果は、民生委員・児童委員の協議会やLineなどを活用して参加していない役員へと伝えてくれるとのことだが、ニュアンスが変わったり意図がズレないかフォローを予定。
- ・課題／美合学区は、第3回の参加者2名、学区に合う方法で連携を高めていきたい。協議体は住民自身が行うものであり押し付けるものではないため、どこまで包括が支援したらよいか迷っている。アイデア出しの場であるが、成功体験も必要のため、アイデアを実現していくステップが難しいと考えている。

【助言】アイデア出しの人がやってしまうとやりきれないということは当然だが、柔軟性も必要。役員でない人に声かけられる仕組みは有意義である。役員以外の関心の高い人を巻き込むことができた。地域には、既存の仕組みがあることが前提なので、どのように連携をしていくのかが注意が必要。

◆編集後記◆地域ごとに重点にしていること、優先順位は異なるため、高齢者の課題ばかりを取り組むことはできません。しかし、介護は若者の生活にも大きな影響を及ぼします。高齢者が元気で住みやすいまちは、障がい者や子どもも住みやすいかもしれません。世代で課題を分けて考えずに、全体で取り組む視点を持たないと、高齢者課題の重要性は伝わらないのかもしれない。